芸術[illegible]文集

坤

へ 5
4522

蕪村文集　坤

早稲田大學圖書

~5
4522

11-3-3

門 へ 5
號 4522
巻

一 春泥集序
一 五車反古序
一 平安歌仙序
一 太祇句選序
一 隠口塚序
一 其雪影序
一 俳題正名序
一 芦陰句選序
一 鬼貫句選序
一 宴ゞ集序
一 むかしを今序
一 桃李序
一 花鳥篇序

△下目

蕪村文集坤

洛　竹巣月居　閲
浪東　貞独庵忍雪
洛　酔菴其成　輯

昭和十一年三月三日 購求

春泥集序

柳維駒子の遺稿を編集して余に
序をこふ序して曰余曾て春泥舎
召波に洛西の別業に会す波すなハ
ち余に俳諧を問答曰俳諧ハ俗語

を用て俗を離るゝを尚ぶ俗を離れて俗を用ゆ離俗の法最かたしかの何がしの禅師が隻手の声を聞けと云もの則俳諧禅にして離俗の則なり波即解す却問叟が示すところの離俗の説其旨玄なりといへどもなほ是工案をこらして我よりもとむるものにあらずや彼もしらず我もしらず自然に化して俗を

離るゝの捷径ありや答て曰詩を語るべし子もとより詩を能す他にもとむべからず波疑敢問夫詩と俳諧といさゝか其致を異にすさるを俳諧をすてゝ詩を語れと云迂遠なるにあらずや答曰画家に去俗論あり曰画去俗無他法多読書則書巻之気上升而市俗之気下降矣学者其慎旃哉それ画の俗を去

たまも筆を採して書を読しむ況詩
と俳諧と何の差別ある事あらん
や故則惜寸哉曰又問ひしへきま俳諧
の教家名々門戸を分風雅を争ふ事
いつれの門を是として能其堂奥をさく
かいんや答曰俳諧に門戸なし只是
俳諧門といふを以て門とす一画系図法
名利の為に分門戸作戸 是画其中俳
諧のかくの如きし法信を売買して去れ

又一毫中に騁へ自其俳趣を探ひ
月を待て出れ唯自己の胸中いんと
観る乃外俳の法なし志ある人を
みちを俳諧して其人に交る事は
らはまら其師に承法をさくるし法向
其友とすはたのかみ誰そや答其角
を龍雲堂を号ひ其堂を僧ゆ
思貫に伴ひ日て出て四方に遊して又
ほうれ市城名利乃域を離き林園

に携ひ山水にうたけし酒を酌て談
笑し句を得ることは専ら不用意を貴
ふかくのことくする事日々或日又四老
に会す幽賞雅懐はしめのことし
眼を閉て苦吟し句を得て眼を開
く忽四老の所在を失すしらすい
つれの所に仙化して去るや恍として
一人自佇む時に花香風に和し月光
水に浮ふ是子か俳諧の郷なりと微

笑す汝ひとへ我社董に海て句を吐
こと数千最も林をなす老を非斥す
余曰まこと楽なき甚謂なしといへとも
ことに人情世態をわすれさるはなをまさ
乃句法に倣ふも又蕉翁の正脈ならさる
にはあらし詩家に李杜を学ふは偏志
抑え句を拈さることくさらに陳腐家
をあさむきて堅瓠雑子ありさとあられ
画家に云法を画魔とすなき則

佛魔なくのきまたく妄念を離て
進て仏路を顧させ給ひみ仏性の佳境
を極むるもしあらすむしろ一旦為すなくて
起つることなけれは形容りそれから得業
何ところへかゆく頭ぬ鏡の影を得し
案をおして生する捨て曰眼らくは東の方よ
流りなるはしくさかるさをとくやに語て
涙潜然として果ひなる帰しぬ案こそ法
て曰我仏無西をもて来仏無西をもて

古のさまく般若とこそ無字の中
ふ説きはなしなるを般若菩語は余ら
凡達の作筆をもて為にもなくの人と
討論すなりを軽躁なるものなく
能く其文をものして此集の為
となるさうそ誰か有此文を見て
淡子の清韻なる哉其ひとかなる
をもつてその名の体なも無き文を味へ
象しくの帰ぬ傍をよりてきるか筆に

あはれ八うんとは我洛下の春泥舎
安永己亥二月蕪村書

芦陰句選序

むかし丹波の国にたなる猿ありける
ものありけるにそのたまもとつて
むなちをかくしてゆりさえんか
なし人其玉を百貫にかへんといふ
ゆゑおほやけにかくてたゞあかるをひかる

あるはあやしひかりかきらかあやしと
おもひて百貫の人あきものとてとらす
まことにかゝるまさしきみかけにかゝる
たまに玉を見るもみなかゝりき
ましとみていよいよきらきらしく
みなかしこきもひてたまふそのそまをなへたるか
なかりむかしもかりんとひし人もなき
さそふかはひとへにかゝりなからなかり
されは大魯か門流芦陰舎稿より

あらはさんとして序をこふもとむ
守か田舎稿ハ出さんもあらなんいはく
よろしく作者のきこえあるもの遺稿
出して選て生前の辞世を減するもの
さらなからは大魯なともよろしき撰稿
維隣の一ありとなきて宗山の叢雑
なるらしされはらの佳る句ハくあの
杯の勝負まてたまらまき稿の出る始せ
んやそのきさ稿を出してらの意あらは

蕉翁ありとなられ門流者さへいたく
うれふ稿ちとあつめてれ蓮子伝として
諸家さし気跡刻年ハふかいるもつて
て存しらひ居ったとやみもふ世さへもすれ
みてやむ金うれ取てその葉經を
窮中ても実して日出稿出さて乃ふし
蕉一派のことくいはくその玄辞立たとさま
ええし是大魯かとも隣の家たるらん
そのまえをかゆるよ見ていらん門流儒会

してきみのきとみなつとよむへし

五車反古序

維駒父の十三回忌にあたりて集をえ
らひて亡父か追善とす　はた悼ある
ふみあつめ又父か友とちの句をもあつめて
四方にもとめ其しるへの筆蹟あつめ
あつめたるは多きものなりしとおもひ
さらなる事ともおほきに旅客

の情乃かきりをしるし又みのつから
いてたちし事ともを書つけたりしを
いひのこすことなく残りの情乃手紙
あるはまたおもひすてたる其句を集めて
まみえたる人のことはりをもよもきて
書ふかく人の句もみなそのこゝろを
ひつしそれをとかくつけ
そろへしてその世乃人の句も手やまゝ
なかはまて集め上下二冊となして

なからぬ序を余にこふ余もかつ辞す
かくて自らを髭くあくにす
筆硯の業を廃するもとひさし
あるともてそのをえ果さなかりしにま
今日のもてまちかへくをとるしみそえ
ちかきにまもなく来白のかりを待て
稿をふくとかなるさてないてら来るを禍
やうへくなりにてのひとを待て稿る
後ともに猶さらに筆業の新を

きゝを捨て宍禍に宇孫を奪ひ去る
余もまたよりて化なそのことをしるして
序とす

鬼貫句選跋

五子の風韻をしらさるものにはともに
俳諧をかたるへからすとなる五子と
いふものは其角嵐雪素堂去来
鬼つらなり其角嵐雪をおのく

其集のあと書堂ハもとより句多く
去来ハ右のつゞき句あまりも諸家にも
鋭きをもてよく作りまするも鬼貫
ありてかつ世にまれなる
不易の筆なれ紙としるしあつめて此度
箕きてありしを写し置てよく此集
見てかねてあるをはるかにありしと深く
み編して画つきともとむるよろしからぬ
をまつるなるべしはしとく伝らんことを

鬼貫ら両筆を録して世の
好事のともがらに示すものなる
板本ハ文字屋自分也

平安二十歌仙序

蕉翁去来一紙両筆ノ書ハ向
某ヨリ菊后ニ傳来ス后又長
松下随古ニ譲ル后ハ吉カ叔父
ナリ向某ハ去来カ通家也

右一紙雨華乃ふところて長私下乃
蔵るところ見て乃ふ稀有乃もの
なるをおもひ此ち来ありさゝ、なき作者
みて薫藻もてのちかれて歎きたし
とりふやられけるとてさゝある人乃
かゝる歌なんといと常やすらは
ひらきもと自らの綴よみていてはかきて
やる事のさまをおもひもとらゆる継續
乃まゝにおきて侍りさしておきて事も

かゝるならひ稀なる事ありけるもてあそび
ありしゆゑはや侍りけれ「稀なる
すらく其のあつまりと瓶華山にて
晴くなる一日春紙嘯山老松下を訪
ひての書をひらき見ていふ人
ゆゑにゆかしき深切なるおもむきとかつても
侍れはすなはち諧話の情に寄る文言
座りて三昧の発端となるまでにして九十
九席をかさねてそれぞれの級作者に

ぬきんてあれと其角か月に霍く
伴ふも傲いす嵐雪か花になくしめる
游ふも擬きすまらてその世のさへ、
去やは蕉翁とやらん仏をもたらね
みすほうもあられたゝ己れかさかの
さやかくは新たなひ家本をとかくみ
たとふなかれ道しれとせよの友三子の
意に叶ふもとすなる佛頌もやしつれ
老人のらん書きとめいとくるしからし杉稿

乃よくいひて樗仙堂か棚架におさめて
はつ見ぬるをもあつらへ三吟なるをふん
そもし老翁人とかたりて三子を催す
ものそ三菓散人蕪村書

宴樂亭

庭白亭の主人身ひとをまねきて諸
子をとりて宴す碧玉盤猩唇駝
峯窮山之珍錫水之錯尽く具せ

まよふきてなし日干よりも我乎よ
いさぎよく螢食さてあかりの我黨
己らむ便くたる胸中文雅の貯
ふきまてを総に結をふち俳歌を
らふ子て侍賦に換へ座にあし自よ
嘯く豈俳家の歡に譲るものんや
有の句を吐て及つまん爐の腹

太祇句選跋

太祇若而小言すらくまことによしならば
遠と云ハ近きなら楽と云ん古杯
俳諧のさひしみあふれ焦慮の為には
そらにさいりし甚為の三斛そても
く数みして鉄杵を鍼に磨し點
滴の石を穿つをしつるもけて我輩の
辛る時もあるもたのむかるものもれま
たるもまてさ無き居りに便とて俳をたのむ
ともなりし和まぬり流くるも昔なる

さるをされハ紙の句集の草稿をまず
かき継ぐる事あまたたびひらきし人のイ
める句をえらびにくへおもひ出るまゝや
いせの大淀の萩の花さへしらふみて
をとろへさん翁筆をとりて尽の末
いつるまゝに書きおくるものにあれと
なるはのはしのいつれ別すはれ出さむも
見へねとも筆に記す荒生の撰者も
眼つゝましきまふひてまとやうにも

らみけるふしもあらしかし余二子
まふさまて大つゝをお難はゝ見や大
かくにかへあらゆはしは我辞も四ツ能
乃えゝし見ゆるに出さる五ふ処の旧を
をふゝひらきて御稿を読し末にきは
みて世をひろうし二稿三稿とうち
ものそ年を経てもをのつく書つきわ
されまてすゝ見れは二子もうけ
ひきてかしこゝにちりや流れまさしるを

其ことを世の中にいふもゆかしよとなる
みえてやらてちかうつにかかつく

むしを今の序

云なる宋代の道の翁の業をこの中庵に
くあきて百里万風の上生と影のこと
く掲くこそ見とも新気をふくみたへ
他力の中のえめてたく当世の人は
去るにて三子の風位を作しけるとて

木のく流行の黙音として是常
のくりふて平がむ迄たきりうてあら
さあるとは中むし武江の名所なる
鎌穂の名く賑めるかたなる安や
したかもして年中に宋をあう
ちたひ取成の様子やてかなて老の
報さめのくき中にもあとまれ俳
をらるて世の上乃さくまてなくは
らへきいたれ耳はかりていとく

さるきおもふて ねがはくはあまねく衆
生をしてきみえしゝて白き佛性
のたちやかならしめのの自性に清浄
をかくははしはん金剛に化し忽然と
して菩提おのれをさとりみちさすゝさとく
そなへてと雑て此一様下に取り得
してやくらいの自在をもちてまします
されハわか宗門によつて見ますとおほえるを
仏法の器量ある徒輩にたのしくなりて

もはら善心の心にさとりし同きをとゝひ
にすへよかくさんとせは我まゝ是外虚
に当りて法界に遊ひはなはたなりてさつね
を佛性に得たる心の法とこゝろわか
さよへさる人そはのえるとそむけ
不測なりしなかのいはいし仏由
ちらはに有ものゝ本覚のゝ仏なり
らのさとりしをとをるこれよあしら
仏性の口に微妙也つまりと説に

まてみそえくるものをききしかたし
偲てなのいやそてかくもなる時の肴と
なよとらふさうろ門下のくゝともに
やむらきぬ

隠口塚序

去もとまくの秋風の塵の序偈にして
おもれての心の名残をとしおして
ゆかしき蕉翁の枕寝はよきをもつ

見るはしめの方をも休んとかなる
あらしされは其魂のおもしくさの
境ひやとるも来やよは舞さとそ翁ひ
て其をとらはきるも去るをかきをあつめ
て一基の碑をいとなみて建るもの
やよこの好士何未なるをそのかけしみんよ
筆をたてしまむけれ句をとまれ
もの其年あの蕪村なるとせむ村

百拙しるす

手折て稍かゝる花のあつさ

桃李序

花のおとふかみかん四時四季乃
此仙を東西秋冬ちたぬ花ゑるて
かたつきぬ一人諸て来て是らんを
はる一人獨して四方のうれへあるすて
やゝとし月を経つゝもおもひ〳〵て
流行すたれ〳〵たらん余笑て眉更

俳諧の流行を云や實の流行
有て実の流行なしたとへは一圓
郭の流行て人をよろこはするとし
先をさるもの都て後まくるゝあ
をおそれに出るを流行のそれはを
知てやらつゐるんやた見よるもの
ねらふ胸懐をとら流し出てさふつも人
みそふふみして名ハみやまの俳諧
なすも談てもしすもとにへめくま

あらもえしなし是此集の大意也

其雪影序

八千や上侯伯より下漁樵にいたるまで
されて俳諧をたのしむものなし只俳諧に於り
ま一家をたて世に称せらるゝ者は
きはめてかたし宗祇の陸三四拾を
亟するたくひもいとすくなし三四と
其維凡圭其角嵐雪を経て生まで
し蕉翁人菴の門にあそびてその
真率に徹すかといふ年時筆の
精に及びて數年ある化せられ
てさびしを俳諧をもて たく
みに体の様をのへきたとして小説
の奇なる古きして諸史の言てたきき文
なもも無あるらさて達者つて
又事なるものを書き人盛かんし
人情世態のおかしき句をなまん

別に圭流ありとさるのおのれて一家
の論おこりぬことし十三回忌なれは几董
小冊子を編てその頃やとふる世乃
追善集にくらふるやゝなりけれて
何ふりち世ふやうまちの色をとも
免すひとことに弄も醋目の味を
於ふ魚肉蔬菜羹饌をもて供す
法まめてあらし余白さいとし又又り
言なるもかの霊堂にあらむも見せまし

いとゆゑやかに念珠をたすけて
称名ねもころにし花法師の仕へ
て何やらく著ふくそれたらんよ栗
の籠骨床をなゆまともかくらめ
寺眼ららくる身本は何にさりける
あしの微笑者はなることし侍まし几董
此篇甘あまり年

花鳥篇序

郭公の勝負なりきは鬼貫の擊

はるゝくみしやまそれにやみよし
御室の山ふところもるゝ庵のゆゑにや
たゝよるもあやしのやま乃みちのゆく
来あれはなさひきてさそろいさゝ
さゝしりれつゝせめて彩夕暮に旅
みやこ清きよ人の花さくらの花
をちくのそし ふかいつけ一帖まゐ
てゆ柁のよのすゝみもとあそひたち
清くとくまさるかたに遊艇をそ

ゐるに緑松窗を蓋ひ荏苒とし
て去清くすはゆめのことからに蕭
條とぬるもくらし暮に暁をまつけ
むくろもからなる丸のみをとゝむ
てみむとすれ止る時きそるおもふある
人趣あるのたんさく短冊てその白
みやこちとのとるひなむせうるちとるれ
よてあまたへ手澤淋漓として雲か
の一群瞻をはるし言下に一句を

仕所謂狗尾をもて貂に継くに
ち地なるを門下の二三子があまた
四とはなすゆへまれやくて三十あまる
みちぬによりて花桜の後つぎ跡
して則此花篇と號けそへして
我蹊勝の罪を謝することしかり

俳諧正名序

俳諧のまことを乃ちよと佐美書

あらけりしてその法をむくらして
きてのまてとも俳諧を法ぬしとはらり
隔てその法を守るしも又法とする
に蹊密あるまゝ軽重あること一巻
の緩急句行乃浮沈を相顧て或
おもてうらふたつのさまとかゝらし
今古のさまを立るに林なす法なる
あるは法をひめしのてし　古嫁の撰
ひられたるこそ緩めたまふし　云々作

なし称就余篇乃正名字の来る
歟の正字をまちまち時ゝその変
五ノ称ハ同なりとこそ　伏水読書
俳諧に心なき其志て一家をなしてを
わりけるこのみ去年正桂学せまま
うまし　春ま子　俳諧の正字通し
疑之香ハ夫白唐の乃人う

蕪村文集上終